

# 資料紹介 尾道市立大学附属図書館所蔵「百人一首」

藤川功和

令和五年度学長裁量教育研究費により、あらたに『百人一首』関連の書籍を本学附属図書館所蔵とするに至った。書誌は以下の通り。

写本一冊。楮紙袋綴。縦二三・九センチメートル、横一七・五センチメートル。外題ナシ。内題「百人一首」（序文に拠る）。墨付六十一丁。一面十行書。「高城文庫」「高城蔵書」の印アリ。序文と奥書は以下の如くである。

## 〔序文〕

### 百人一首序

抑此和歌は定家の代々関白職なりしが、俊成卿此関白を定家にゆづりたまひしに、家隆卿うらみたまひて関東金沢称名寺にて庭のみぢを見てあそばす也。いかにして此一もとにしぐれけん山にさきだつ庭のみぢばとあそばしければ、此紅葉のせい女房となりて夜半に来て御酒を奉て御心をなぐさめ申ければ、此事都に聞え、やがて家隆をめし□<sup>よ</sup>せて、開白になせし給ふ。其時定家に御ゆづりたまひし赤色の衣をうばひとりたまふ。其時定家の哥に、

いきながら皮をはぐこそ恨みなれ

みぬもろこしのとらをきくにも

とよみたまひて、小倉山へわけ入て世をいとひ、此百首をせんじたまふといへる也。扱称名寺のみぢは家隆の哥より此かた今に青葉なるよし申つたへたる名木也。

\*行取りをあらため句読点や濁点を私に付した。虫損は□で示し、右傍（ ）内に私案を示した。

## 〔奥書〕

有此本難為御秘書横々年々懸／執心を如祈写取者也聊不可有／  
他見者也千金莫傳可秘／

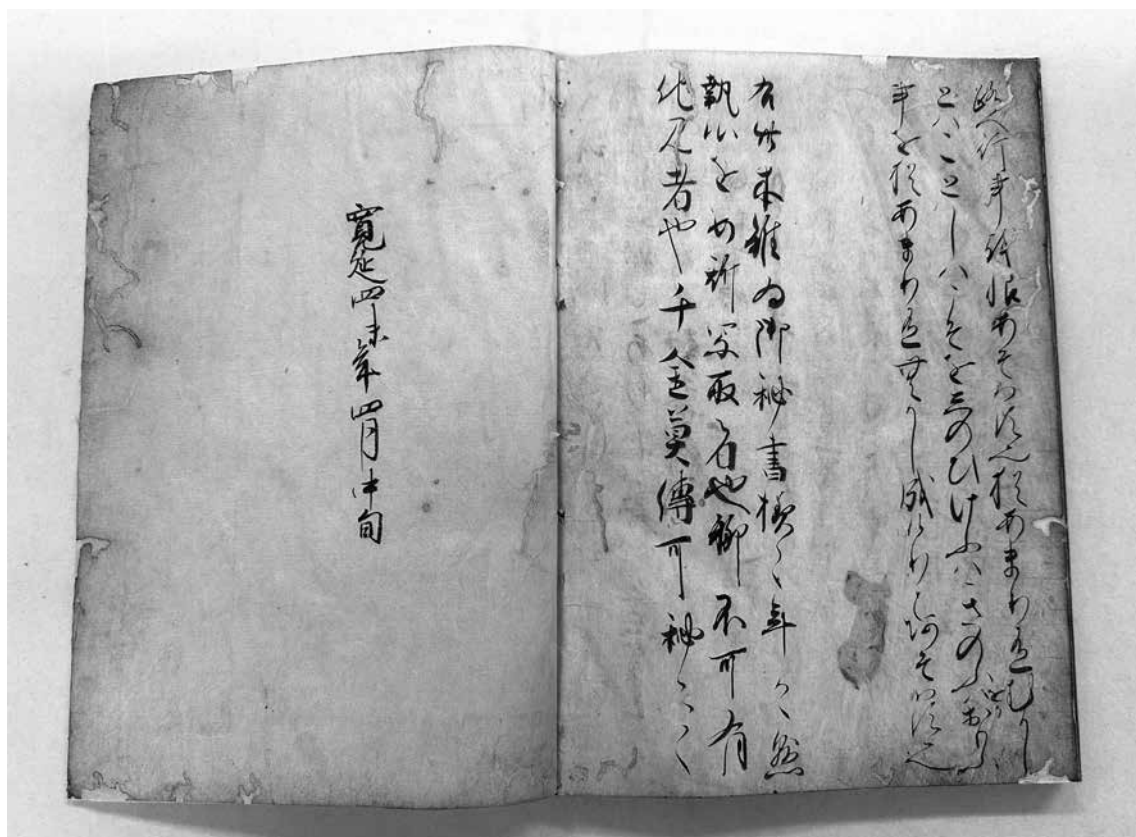
\*／は改行を示す。

百首にはそれぞれ注が記されており、裏表紙裏記載の「寛延四年<sup>末</sup>四月中旬」を信じるならば寛延四年（一七五二）四月以前成立の『百人一首』の注釈書である。序文中に引かれる「いかにして此一もとにしぐれけん山にさきだつ庭のみぢば」<sup>（世）</sup>、「此紅葉のせい女房となりて夜半に来て」、「扱称名寺のみぢは家隆の哥より此かた今に青葉なるよし申つたへたる名木也」等には、謡曲「六浦」との関連性が看取されようか。

また「田家露 天智天皇 秋の田のかりほの庵のとまをあらみわが衣手は露にぬれつゝ」等、百首冒頭にみえる『百人一首』本文には記載のない歌題が目を引く。今後全文の読解と考察を進めたい。

〔注〕当該詠をめぐっては小川剛生氏「謡曲「六浦」の源流―称名寺と冷泉為相・阿仏尼（『金沢文庫研究』347号 2021年10月）に詳細な考察が見える。





〔付記〕

序文の読解に際して藤沢毅氏より種々のご教示をいただいた。記して深謝申し上げる。

本稿は令和五年度学長裁量教育研究費（研究課題「デジタルアーカイブ構築に向けた絵入り本『百人一首』の歌意絵の基礎的研究」）による研究成果の一部である。